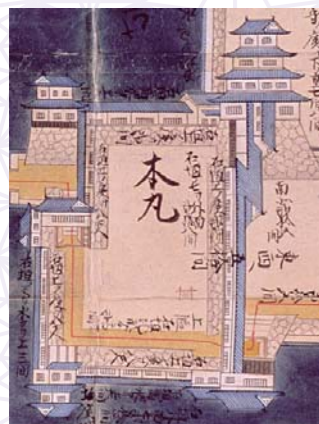


天守丸の広さは、国宝姫路城とほぼ同じ



府内城の天守は直接登ることが出来ない造りで、櫓や門とつながっていました。国宝姫路城の天守も同じ構造です。天守に取り付く櫓や門があった所(天守丸)は、本丸の中でも石垣が一際高く造られ、その面積は姫路城とほぼ同じ広さ(約1,500平方メートル)でした。

「豊後府内城之絵図」 国立公文書館デジタルアーカイブを使用

古絵図にある、西之丸角櫓両側の板塀

江戸時代の終わり頃の府内藩では、地震や火事など天災が相次ぎ、主な建物の姿を正しく記録しています。



その一つが右の絵図で、角櫓の両側の塀は板塀でした。

板塀は外しやすく、構造が軍学書にある「切戸塀の砲門」と同じことから、大砲を設置するために造られたのかもしれない。



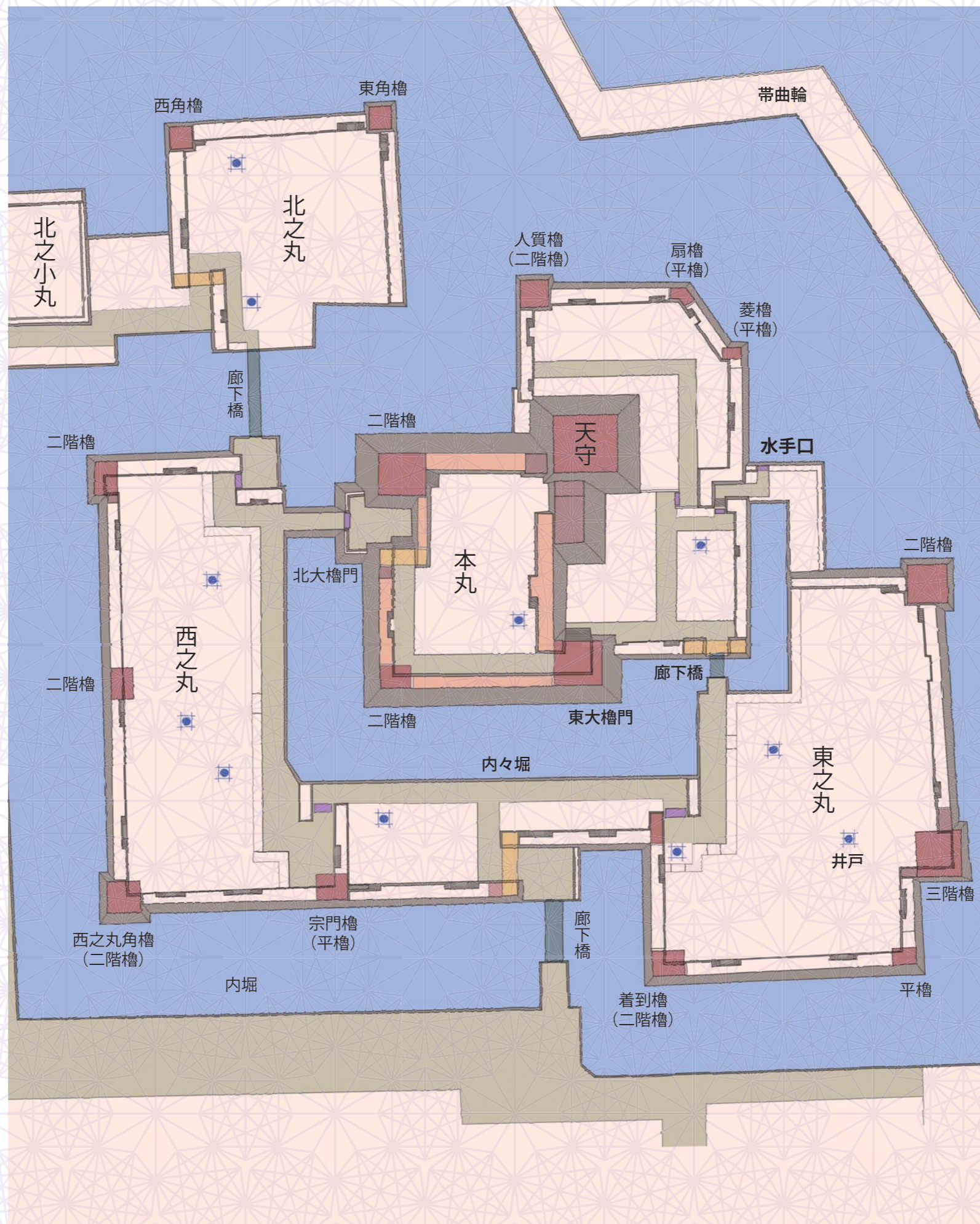
江戸時代終わり頃の西之丸角櫓 (上図:西より、下図:北より) 【松栄神社所蔵絵図】

大手口の橋も廊下橋

塀や屋根のある木製の橋で、入口には扉までついていました。敵の一斉攻撃から身を守り、城内から撃つには最適な造りで、府内城には3箇所、大手口をはじめ、北之丸から西之丸、東之丸から本丸にわたる所に廊下橋が架けられていました。



江戸時代終わり頃の大手口の廊下橋 【松栄神社所蔵絵図】



小舟で堀を渡る緊急避難路(水手口)

本丸東側の石垣が途切れ生垣のあるところに、内堀につながる門と階段がありました。この通路は府内城の天守や東之丸の三階櫓などが焼失した寛保の大火(1743年)で、役立ちました。御朱印(幕府からもらった大切な書類)をここから舟で運び出し、一時避難させることに成功しています。



「府内城下町絵図(部分)」 大分大学学術情報拠点(図書館)所蔵

天守の次に大きな東之丸の三階櫓



1599(慶長4)年に福原直高が建てた三階の高楼で、全国的には小天守または天守に相当する建物です。城内から見れば天守と同じ四層の櫓で、府内城においても天守に相当する建物と言えます。寛保の大火で焼失し、その後、再建されることはありませんでした。

「豊後府内城之絵図(部分)」 国立公文書館デジタルアーカイブを使用

東之丸南側の張り出しは城の守りを強くした

鉄砲や弓矢を横から射掛け、死角をなくして敵を多角的に攻めるための施設で、当時最新の構造設計が採用されています。馬出と呼ばれるこの張り出しは、大手口や三階櫓を防御する機能を高めました。

